

巻頭言

いもの効用

財団法人 いも類振興会

理事長 生天目 健 蔵

「甘藷先生」というと、青木昆陽のことで、関東各地に甘藷の栽培を普及させた功労者として、幕張の昆陽神社の祭神となっていることは、明治以来世の人の知るところである。篤志家として、昆陽自身の発意で盡力したものとばかり思っていたところ、これは八代將軍吉宗の指図により、大岡越前の推挙によって、幕府に登用され、その最初の仕事が江戸でのサツマの試植なのであった。

その登用の試験台が、昆陽の書いた「蕃藷考」で、大岡越前がこの書物を読んで大いに感心し、これを吉宗に見せたので、吉宗も感心して、彼を起用することになったのだという。

その「蕃藷考」には、イモの功德が13挙げられている。宮本常一氏の「甘藷の歴史」から援用させて貰うと、「第一に一畝に数十石（筆者註。米に換算して）もとれる。第二に色が白くて味がよい。第三にトロロとおなじように、人の薬になる。第四に茎をきって種にすれば、今年一茎が来年は数石分の種になる。第五に茎が地につくと、そこから根がおりるので、風雨に損ずることがない。第六に代用食として飢饉をまぬがれることができる。第七に菓子同然に利用できる。第八に酒になる。第九に干して粉にして餅になる。第十に生でも煮ても食べられる。第十一に忌地というものがないから、おなじ場所にいつまでも

つくられ、またつくりやすい。第十二に春夏に植えて九・十月にとりすておいてもイモができる。第十三にウンカの害をうけない」。

この最後のウンカの害がないということは、享保16年に、西日本でウンカの発生を見て手ひどい不作となり、同17年秋には言語に絶する大凶作となり、同18年1月までに幕府に達した飢人の数は93万人にのぼったが、実数はこれに二、三倍するものであった情勢を反映したものであった。

吉宗は、この飢饉の対策に苦慮したが、妙案がなくて困却していたところへ、近臣深見新兵衛が長崎の出身で、イモが栽培され、五穀の代用として九州に普及しており、そのため九州では餓死を免かれたという進言を受けたので、関東にもイモを普及させて飢民の発生を防止したいということになり、偶々昆陽を起用することになったという。

昆陽の活動の背景に、將軍の政治力があつたということは特筆すべきことだが、それで昆陽先生の功労が消えるわけではないから、尊崇の念には変りはない。「蕃藷考」にこれだけイモの功德をあげた昆陽は、どこでイモの知識を学んだかであるが、甘藷がすでに普及していた関西で学び、伊藤東涯の弟子の松岡成章（蕃藷録の著者）を先輩として持っていたので、甘藷栽培に精通していたというのである。